

地域医療最前線  
**軽井沢町国民健康保険軽井沢病院**



軽井沢町国民健康保険軽井沢病院  
**牧山 尚也 院長**

**観光都市・軽井沢の  
 医療を支える国保の病院**



皇石殿下御参仰



病院入口

長野県の東端、群馬県との境域にある軽井沢町は、浅間山の南東斜面、標高900〜1,000m地点に広がる高原の町。  
 浅間山をはじめとする山々、湖沼や滝など美しい自然に恵まれた軽井沢町は、かつて時の宿場として栄え、1886年にカナダ生まれの英国聖公会宣教師A・C・ジョー氏により、避暑地として好まれると内外著名人に紹介されて以後国際的保養休業地として、また有数のリゾート地として発展してきた。

高速道路や北陸幹線が整備されていくため各方面からアクセスも良く、この地を訪れる観光客は年間840万人を超える。

多くの人から愛される軽井沢、この町にある「軽井沢町国民健康保険軽井沢病院」が今回の取材先。院長の牧山尚也先生と篠原昭裕部長から話を伺った。

軽井沢へ向かっている間降り続いた雨は、目的地に着く頃にはほぼやんだ。暑くないが湿気が多くじっとりした感じだ。

再び雨が降り出さないようにと病院周辺を写真に収め、その後街なかを少し回った。観光シーズンのバイクを連れ、人気のお店は観光客でにぎわっている。少しだけリゾート気分を味わった。

**脊椎外科の  
 専門家になるために**

愛知県名古屋出身の牧山先生が軽井沢病院に着任したのは平成33年6月。着任のきっかけは、東京へ脊椎外科の職へ研修に行くため、大学の関連病院で一番東端に位置する病院を選んだ、ということだった。

詳しく聞くと、富山医科大学大学院（現・富山大学）卒業後、脊椎外科のもとで勉強しようとした。すると、その助教が東京女子医科大学の教授に就任されたため、軽井沢病院に着任し、そこから東へ通ったということだった。先生は当時を振り返り「私の出身大学は新設の大学だったので、関連病院はペナラの先生がいた。師



待ち合いスペース

**距離が近いことが  
 新鮮だった**

事する先生に直接頼り出るといっただけでなかった」と情を説明した。

先生は、現在も脊椎疾患を中心に診療し、手術は年間約70例、病院着任後から通算すれば1,000例以上になるという。外来診療は週4回行い、1日20人程度診療している。

「病院の第一印象として近くと「病院スタッフと医師との距離が近い」と答えてくれた。大病院や4000床程度の中規模病院で勤務している時は「コメディカルや事務の人とはあまり会話をすることはなかった。お話し合いに幅を割って問題などを話さうという意識」が新鮮だった。当時は常勤の医師も少なく、こちんまりと忙しい。医師もスタッフも一線にやっていたという感じ」と語った。このようなスタッフの関係性は現在も続いている。

**観光地の事情**

軽井沢町の特徴は、人口は約2.5万人だが、別荘は1万5千戸以上あり、観

光客も多く訪れるということ。夏のピーク時には、このに滞在する人口が約20万人にもなるのだという。

病院の外來診療数などに影響するのではないかと心配したが、多少増える程度だろう。その理由を聞くに、地元人は7月初旬に受診した時に、薬をいつもより長めに処方した。多いよ、とのことがない限り病院へは行かないというので、この時期は初診の患者数はむしろ増えるが、結局「多少増える」程度だという。

**身近な病院として**  
 病院では公開講座や病祭を開き、病院の紹介や地域の皆さんに健康意識を高めてもらう取り組みを行っている。最近では、病院で開始した大腸CT検査や認知症認知症者調査について紹介した。なお大腸CT検査は県内で一番回数が多いとのこと。  
 今年の3月29日は「がん検診外来」を松州大学医学部附属病院と共催した。がん患者の人、治療した人、その家族などが集っている様子が不安などを語り合う場が提供された。



**地域の病院としての  
 役割**

軽井沢病院をはじめとする県央地域の病院は、病院の特色を生かして役割分担し、地域医療を担っていくと

している。それに関しては各病院長と合意が得られているという。

軽井沢病院は、急性期医療を終えてリハビリテーションを行う患者さんを受け入れ、その患者さんが「自宅に帰る」というところで役割を果たしている。回復期リハビリテーションの病棟は常に8割以上稼働している状態。リハビリは理学療法士、作業療法士12人で対応し、患者さんの体力を戻して自宅に帰れるよう指導している。リハビリを行うため「看護生が生まれ」といって、患者さんへリハビリの大切さを指導しているようだ。

リハビリ室のすぐ近く、患者さんが部屋を動かしっぱなし使って、声を出して体を動かしてリハビリをしている姿が



膠原病内科専科から医師1人を選出していたのだが、さらには夏、応援の医師が来てくれた。内科は常勤医師3人体制となり本格的に「助かる」とい、「機能的な病院と大学病院との連携が大切」と強調した。

ただし、この体制も夏限定。軽井沢病院では現在も常勤医師を募集 중이다。

## 広々とした院内

院内を篠原事務長に案内してもらった。築1年経つてまだが新築同様だ。2、3階の病棟は、廊下や病室が広々としていて開放感がある。リハビリ室に近い階段には数字が書かれていて、事務長に尋ねると、リハビリの時に数



踊り場できっとみ

階段の段数が書いてある

見られた。

一方、診療所との連携では、入院が必要だと診断された患者さんの受け入れ、医療機器を有効利用するためのCTやMRIの撮影を行うなど、軽井沢町の拠点病院としての役割を果たしている。撮影された画像データは、地域医療連携室を通じて診療所とやり取りをしている。特にMRIは、町内では軽井沢病院としかく予約のいっぴいの状態だという。

地域医療連携室は患者さんの紹介や検査の受け入れに設置され、利用しやすい場所にあると感じた。

## 患者さんと話す時間

都会から来た人がけがなどで入院した時、「先生や病院スタッフと話す時間が長く、よく話を聞いてくれる」と言われるそうだ。そのことについて先生は「郡会の大病院と比べて忙しくないというところがあるからかもしれないが、患者さんと話すことが医師の基本だ」と思っている。全ての医師も民間実践してきている。看護士も同じように取り組んでいる。と目こぼれしていることが患者さんの満足につながっている。

えやすいようとして新築する際にスタッフから要望があったことを説明してつづけた。踊り場には、休みできるイスも設置され、患者さんに配慮した通りになっている。

1階は初診受付、会計、各科外来があるが、こちらも手狭な感じはなく、明るく落ちる自然光が嬉しい。午後になると、中学生がバスの待合室として利用し、にぎやかになるそうだ。



軽井沢バスターミナル

病院のバス停には簡便なバスが停まる。病院の受付にあるモニターにはバスマップが表示され、バスがどの辺りまで走っているのかひと目で分かる。これは、まっすぐに活動支援事業として採用されたものだという。便利な機能的な感じだ。



リハビリ室

広々とした廊下

ていよと教えてくれた。

また軽井沢特有の空気感について「病院内のことだけでなく昔々「生活も同じ。大学病院の頃は、実験の時に移り単位で大変なところがあった。いい結果が出ないので、誤差の小さいタオツツ時計をしていたが、軽井沢に来たらクォーツ時計の針が動くのが合わないと思い、機械式時計に変えた。針が合わないのに動いているのがこの町に合っているなと感じている」と話した。

## 敷地内の草取りを全員で

職員全員で第1、第2の連日の月火曜日の業務終了後、病院敷地内の草取りを行っている。自分たちで草取りという意識があると思いが、長く続いているとのこと。

きれいに整備された駐車場には「草后敷下御草餅」があり、そばには御歌にある「夕すげの花も種も花も花を吹かせている。」

## 患者さんとの距離が近い病院を

先生は「地域の人たちが隣の病院に行かなくても十分に診療が受けられるようになる。患者さんとの距離が近い病院になる」とことをかけている。

観光客でにぎわい、人口も増加している軽井沢町も高齢化や高齢者の施設世帯など問題は列でではない。「在宅医療を発展させていけば、緩和ケアも含めて力をいれなければならない」と思っている」と抱負を話した。

さらに、軽井沢が全国一の別荘地、全国有数の観光地であり続けることが

## 大学からの派遣で一歩前進

病院の課題について「現在、医師の定員数14人のところ9人しかない。17月下旬の時点で、人間ドックも常勤医で対応できない状況にある。病院機能としては、今は十分ではなし」と医師が定員を満たしていないと嘆息し、現状を打ち明けた。さらに、医師が着任してもどの程度で初期間で病院を去ってしまうことが続いたという。

先生は、このような出来事は病院の信頼をなくすとし、「患者さんにとって裏切りになってしまう」と声を落とす。このような状況で、中明いながらも「17月5日」と先生の方策が長くなること、それが患者さんの信頼を得る「一番の方法」と強く語った。



篠原事務長

できる原因の一つとして、「町立の医療サポート体制が整っているか」との考えを示し「しっかりとしたプライマリケアがないと、医療崩壊へと、充実させていくのが私たちの使命で、これからの病院の役割だと思いを込めたい。先生の趣味は「スポーツ」で山道を駆け回る。取手町の穏やかで物静かに話す先生の口からは想像もつかない。

さらに、「アレス・オブリジニ（Ares Obrijini）」が座右の銘だ。とつぶやいた。「社会が不安定であるものはそれに負けたら行動を止めてあるという意味で、病院の中で私が一番働かなくてはならないと思っています」と先生の力強い言葉に聞いた。

患者さんとの距離が近い病院は、医師とスタッフの距離も近い。これから一丸となって、地域に寄り添い、軽井沢を訪れる人々へ医療を提供し続けてほしい。



夕陽の花